

2023年12月24日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「愛のあるところに神あり」

聖書：ヨハネの手紙一4：7～12

2023年のクリスマス礼拝を迎える。この時期、子どもたちにとって待ち遠しいのがサンタクロースだろう。ところであのサンタクロースが何故プレゼントを配るようになったのか。サンタクロースの物語を見てみると彼もまた、イエス・キリストに出会い、罪赦された者として神様から沢山の愛を頂いたので、少しでも受けた愛の恵みを分けてあげたい。その思いから困っている人へ、プレゼントをあげると言うことが始まったようである。

今朝の聖書に「いまだかつて神を見た者はいません」（ヨハネ一4:12a）とある。確かにそうだろう。しかし聖書は続けてこう記す。「わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり」（ヨハネ一4:12b）と言う。それはどういうことなのか。

ロシアの文豪トルストイの作品に「愛のあるところに神あり」（※「靴屋のマルチン」の題名がなじみ深い）がある。この物語は、マルチンという主人公は妻を亡くし、子も亡くし、一人ぼっちになり、すっかり望みを無くしていた。その彼に一人の老人が会う。この老人の言葉に心動かされる。老人はマルチンにこう言う。「あんたが望みをなくしているとすれば、それはあんたが自分の喜びのために、生きようとしているからだよ。」そして、神様のために生きるようにすすめられた。マルチンは「神様のために生きるとはどういうことですか？」と尋ねる。

この物語では、人との出会いを大切にすることの中に、神との出会いがあるとする。「いまだかつて神を見た者はいません。（しかし、）わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまり」、神の愛を、神のかたちを見せていただくというのである。人を大切にすると、そこに愛が生まれる。その愛こそ神であり、神は人の中に、愛の中に神を表すことを教えている。

私たちはどうか。身近な家族同士は愛し合っているだろうか。夫婦の間はどうか。学校や職場ではどうか。人は弱さのゆえに自分の喜びのために生きようとする。私たちのこの世界は、余りにも人を大切にしない世界がはびこる。戦争がやまない世界、貧困に、差別にあえぐ人たちがいる。悲しんでいる人たちがいる。そのことをクリスマスだからこそ考えたい。

私たちは、出会う人、一人ひとりには、神様が共にいることを覚える時に、改めて人との出会いを大事にし、向き合うことを心掛けたい。（神谷）